

序 文

吉村武彦

人類は、文字の使用によって、文明社会に入るといわれる。文字が発明される以前には、絵画や記号文などが存在し、個人・集団の意思表示の役割を担っていた。このように「話すこと・聞くこと」の段階から、さらに「書くこと・読むこと」が付け加わり、文明社会に到達するのである。

国家的支配が問題になる時期には、各種の情報伝達し、蓄積するために文字は必要・不可欠な存在となった。書く(刻むことも含める)ためには、文字を書く紙・木材・土財・石材・金属などの素材(媒体)と、筆・ヘラ(篋)などの書く道具が必要となる。これらが文字関係の史・資料ということになる。

文字の歴史を明らかにするためには、文字そのものの考察のほか、文字関係の史・資料研究が必要となる。これらのなかには伝世品も存在するが、その多くは地中から出土する遺物である。したがって、もともと残存しやすいものと、にくいもの、残存できないものがある。

さて、地球上では各地域で文字が発明されたが、日本列島では独自の文字を創りだすことはできなかった。しかし、中国大陸から海を隔てて東縁に位置する列島では、直接あるいは朝鮮半島を介して、中国で発明された漢字を受け入れることができた。そして、漢字文化圏に属することによって、中国で発展していた政治思想としての儒教や礼制度、そして漢訳仏典を通じて仏教などの宗教思想、さらに律令を受容して律令制国家を築くことができた。

漢字は、漢字文化圏である「東アジア世界」の共通語の役割を果たしており、漢字の取得によって東アジアの一員となる。列島と大陸とは、そもそも使用される言葉の意味が違えばかりか、文法構造も異なっていた。しかし、漢字・漢語・漢

文を利用することによって、自らの意思や国家意思を表現できるようになり、個人・国家間の意思伝達も可能となった。

日本古代では、世界的には希有ともいわれる正倉院文書が存在する。これは『大日本古文書（編年文書）』（東京大学出版会）として、刊行されている。ここには厳密に言えば、「文書」のほか、「帳簿・書類」などが含まれている。

地中から出土する文字史料（資料）としては、木簡が最大の史料群である。その数は五十万点近いといわれるが、奈良文化財研究所のデータベース「木簡庫」で公開されている。ただし、文字が判読できるものは限られている。古代史研究では、『日本書紀』『続日本紀』などの六国史や、『令集解』『類聚三代格』などの法令集を使うことが多い。しかし、編纂物であり、同時代史料としての木簡などは、史料の性格に違いがある。

木簡について多いのが、墨書土器（刻書土器を含む）であり、実際には二十万点近いと思われる。本来ならば国家的機関によって集成し、データベースを構築するような研究業務である。こうした兆しがなかったため、我々のチームが主に文部科学省（日本学術振興会）の科学研究費の支援を受け、一九九九年（平成十二）から、墨書土器のデータベース構築を進めてきた。当初は手探り状態であったが、現在は双方方向性もち、ネットワーク環境を利用した、オンラインによる日本墨書土器データベースを構築している。科研費という公的資金によって作成しているデータベースなので、原則的に公開するかたちで運用している。

そして第三に、文字瓦や紡錘車（紡輪）の類と漆紙文書である。それぞれ詳細な研究やデータの集成が行なわれている。文字瓦は、明治大学日本古代学研究所のホームページで公開している。紡錘車（墨書・刻書紡輪）については、高島英之「紀年銘刻書紡錘車の基礎的研究」（『日本古代の国家と王権・社会』塙書房、二〇一四年）と本書第三部所収の「7 刻書紡輪」をあげておきたい。また、漆紙文書に関しては、古尾谷知浩『漆紙文書と漆工房』（名古屋大学出版会、二〇一四年）に、漆紙文書の出土遺跡一覧と積文集成が掲載されている。これらは地道な研究作業を通じて集成されており、出土文字史料としてはきわめて貴重なデータといわなければならない。

本書は、出土文字史料のうち、木簡・漆紙文書を除き、墨書土器・文字瓦・紡錘車に照準をあてて編集した研究論集である。これまでは、墨書土器データベースの構築を中心に力を注いできた。古代史研究に資するためには、全国各地の墨書土器を集成し、ある程度のボリュームが必要と考えてきたからである。

ところが、毎年のように出土する墨書土器のデータ集成には、限りがない。データベースの構築と並行して、中間的なかたちでも研究総括が必要と考えるようになった。そのためチーム内で相談し、研究小括を成果として刊行しようということになったのである。

本書では、列島が漢字文化圏ということもあり、文字どおり東アジア世界を網羅しようと試み、中国・朝鮮半島・ベトナムに視野を拡げている。実際にも、中国・半島・ベトナムには墨書土器が存在しており、南京・慶州・ハノイの各博物館・研究所において実見してきた。現在のところ、墨書土器の点数は日本とは異なって少なく、研究者も限られている(ほかに魅力的な遺跡・遺物が多いということかもしれない)。

本書では、多様な墨書土器と文字瓦・紡錘車という史・資料を考慮して、全体を四部構成として必要なテーマを設定した。我々のチームだけでは必ずしもカバーできないので、墨書土器・出土文字史料に精通している最適の研究者の協力を得ることにした。

第一部「出土文字史料としての墨書土器・文字瓦」では、吉村武彦「1 出土文字史料の歴史」が、発掘調査によって出土した文字史料の歴史を概観した。絵画・記号文から文字の利用まで問題は多岐にわたっている。

次に、矢越葉子「2 データベースからみた墨書土器」において、本プロジェクトの最大の特徴である墨書土器データベースがどのようなものであるか、どのように扱えば情報がえられるのか、その基礎データの解説を行なった。パソコンの発展によって、身近になったデータベースを利用できる研究環境に、墨書土器研究も新しい研究段階に入ったことを知らされる。

しかしながら、肝心なことは墨書土器とは何か、どのような場で使われたのか、記された文字はどのような意味を持つのか、という基本的事項であろう。三上喜孝「3 墨書土器とは何か」は、研究史を振りかえりながら、この基礎的な問いにいていかに答えていく。集落から出土する墨書土器が、単に祭祀・儀礼だけではなく、背景にある農業経営や「虚構性」などの視点から、墨書土器の新たな特徴をえぐり出している。

加藤友康「4 墨書土器と情報伝達」は、墨書土器が書記された時点での情報を伝える史料であることに改めて注目する。情報を発信する文字は、単字で書かれる場合と多文字で記される場合とがあり、文字の種類・性格も異なっている。また、文書様墨書土器や帳簿様墨書土器も存在し、文字以外に人面も描かれている。それぞれどのような役割を果たし、どのような機能を持つのか、情報伝達の問題も重要である。とりわけ和歌墨書について、「情報の流れ」を掌握することは、和歌

の研究課題でもあろう。

文字瓦に関しては、中村友一⁵ 飛鳥・奈良時代の文字瓦」が、文字瓦の瓦の種類、文字の記銘・表記の仕方の説明し、研究史を整理する。文字瓦が江戸時代から紹介されていることに、驚かれる読者も多いだろう。ついで文字瓦出土の主要な遺跡と記載内容が紹介されるので、文字瓦の概要をつかむことができる。デジタル史料と違って、全体像を知るにはアナログ史料の方が分かりやすい場合もある。さらに文字瓦研究の意義と、研究の新視点が説かれている。

第二部「日本と東アジアの墨書土器」は、遺跡の性格に応じて区分けし、さらに東アジア諸国の墨書土器・文字瓦・出土文字史料について論及した論文から成る。墨書土器は官衙においても、中央の宮都と地方官衙では違った様相がある。また、寺院には寺院独自の特色があり、生活の場である集落ではさらに異なる特徴がある。

市大樹「1 宮都の墨書土器」は、大量の土器が使用され、後に廃棄される宮都の墨書土器を考察する。少ないとはいえ、墨書される器物は最盛期には数%といわれる。しかも、各地から将来され、なかには調庸物などの納税品も存在する。そのため地名・人名の記載が少なくない。木簡との比較も可能であり、墨書土器の独自の特徴が指摘されている。

一方の国府と郡家の地方官衙遺跡については、柴田博子² 地方官衙の墨書土器」がとりあげる。遺跡・遺構の特徴から官衙遺跡であることが想定できても、文字が出土しないとなかなか判断が難しい。「国厨」や「郡厨」の墨書土器が出土すれば、官衙の性格を判断する一つの材料となる。国府からは、どのような文字が墨書土器に記銘されたのか、その一覧表から国府の墨書土器の特徴に迫っていく。郡家の場合は、典型例から、郡家関連遺跡まで及んで考察する。

官衙遺跡と対比される寺院については、川尻秋生³ 寺院の墨書土器」が、「瓦葺きの寺院」と瓦を葺かない村落寺院(村堂)に分けて考察する。寺名には、地域名からくる名称(たとえば飛鳥寺)と法号(法興寺)とがあるが、これらの名称は墨書土器から復元できることも少なくない。また、墨書土器から寺院の諸施設を判定できることもある。文字数が少ない墨書土器にもかかわらず、東国の村落寺院の輪郭が明らかになる研究である。『日本霊異記』との比較も可能となる、新たな研究の道筋を示す。

地域の集落については、どうであろうか。栗田則久⁴ 集落の墨書土器」は、この研究課題に迫っていく。墨書土器の出土は、地域によってかなり事情が異なるが、東国における出土数が多く、なかでも千葉県が突出している。一般的には、一文字ないし二文字が圧倒的であるが、少数ながら多文字もある。本論考は出土点数の多い県の特徴を踏まえながら、千

葉県の下総国印旛郡村神郷と上総国山辺郡出土の墨書土器の特徴を、新たな編年基準で摘出する。新たな土地開発や地域の拠点集落に多く、重要な役割を果たしているという。以上が、日本列島に関する宮都・地方官衙・寺院・集落の墨書土器の論考である。

さて、研究の視野を東アジアの漢字文化圏に拡げると、墨書土器や文字瓦などの出土文字史料の特徴は、奈辺にあるのだろうか。

金在弘「5 韓国出土の古代墨書土器」は、朝鮮半島における墨書土器研究の到達点を明らかにする。日本の墨書土器との研究比較では、朝鮮半島の墨書土器はきわめて重要である。文字のある銘文土器として、墨書・刻書・押印土器に分類し、三国時代と統一新羅時代に分けて、それぞれの時代的・地域的特色を解き明かす。統一新羅時代では王京と地方の遺跡に分けて紹介されており、日本の墨書土器を考察するうえで有益な論点が提供されている。

中国では、「土器」の用語について日本とは異なる定義がある。石黒ひさ子「6 中国の墨書陶器・墨書陶磁器」は、中国の相違点に留意しながら、墨書陶器と墨書陶磁器の特徴に迫っている。中国でもかなりの出土品があるが、まだデータ集成が行なわれておらず、遺跡報告書から集成する必要がある。本論考は、こうした現状から墨書土器研究の体系化をめざした序説的意義を有するものである。以上で、日本列島・朝鮮半島・中国大陆における研究の状況が提示されたことになる。

ところで、瓦は六世紀末に仏教寺院の造営と関係して百済から導入された。朝鮮半島には、楽浪郡の設置(前一〇八年)にもなって伝わった。そのため、文字瓦の使用も楽浪郡と関係して開始されている。李炳鎬「7 百済・新羅の文字瓦」(生江麻里子訳)は、百済と統一新羅時代の文字瓦の展開を追い、韓国古代史における文字瓦研究の方向性の提示を意図している。百済や新羅の文字瓦は製作集団や年号の刻印が多く、検収の意味が多い。しかし、新羅末に大きな画期を迎えるという。

ベトナムでは、タンロン皇城遺跡の発掘で出土文字研究は新たな段階を迎えている。ファム・レ・フィ「8 出土文字資料と安南都護府の研究」は、新段階に応じた意欲的なベトナムの文字史料研究である。文字の使用と関係する安南都護府に関するこれまでの研究を総括し、国内外の史・資料を駆使して成立年代を明らかにする。また、ベトナムの出土文字史料の主流である文字磚を活用しながら、安南都護府の実態に迫る。これまであまり紹介されていないベトナムの出土文字史料であり、貴重な発信である。以上が第二部の紹介である。

さて、第一部では墨書土器と文字瓦の特徴、そして第二部では出土する遺跡の性格に応じ、宮都・地方官衙・寺院・集落から出土する墨書土器の特徴について概括的に論じている。ある意味では墨書土器の定義や、遺跡の性格を重視した研究視点である。しかし、書記され描写された文字・絵から墨書土器を観察すれば、どのような「場景」がみえてくるのか、これもまた重要な研究課題である。

遺跡から出土する墨書土器（刻書土器を含む）には、書かれた文字の種類（仮名・漢字）や、文字そのものにも「個性」がある。日本語の表記という観点からいえば、どうして文字が記され、どのような特徴があるのか、誰しもその謎に迫りたくなる。また、文字も記され（少数例）、あるいは文字の記載がない（多数例）人面の姿が描かれた人面墨書土器がある。これらは何を意図して書記され、描写されたのか、関心を持たざるをえない。しかも遺跡によっては、墨書土器も木簡も出土する遺跡がある。何か特別の理由があるのだろうか。

こうした関心に応えるために、第三部では「墨書土器の諸相」、第四部に「遺跡のなかの墨書土器」の部立てを行ない、墨書土器の魅力を具体的に伝えようと思う。

土器は縄文時代からみられるが、縄文土器では火焰（火炎）土器に目を奪われる。しかし、人面付き注口土器や人面のある吊り手土器など顔が描かれている。どうして土器に顔面が記されるのであろうか。芸術作品ともいわれるが、土面や仮面も造られている。こうした土器には直接にはつながらないが、人面墨書土器の面相も興味深い。山路直充「1 下総国府から考える人面墨書土器祭祀」は、千葉県市川市の北下遺跡出土の人面墨書土器を手がかりに祭祀の実態に迫る。

墨書土器の文字は一、二文字の漢字が多く、多文字の墨書は珍しい。ところが、近年、仮名書きの墨書土器（仮名書き土器）が出土し、注目を集めてきた。鈴木景二「2 仮名書き土器」は、仮名が記された土器を通じて、平仮名（平かな）の成立問題についての研究の現状を語る。いうまでもなく仮名書きの文学作品は写本を通じて伝世されたので、原本そのものが存在しているわけではない。仮名書き土器は同時代史料であり、日本語表記史のうえでも重要な意味を持つ。

一方、一、二文字の漢字が書記された墨書土器は、どのように理解したらいいのであろうか。荒木志伸「3 墨書土器の文字」が、この課題に応える。時期・地域によって様相は異なるが、「大平」墨書土器の特徴を考察した後、「寺」の文字が記された墨書土器について遺跡ごとに分析する。「寺」字が必ずしも寺院施設を示さないことなど、墨書土器における文字解読の研究姿勢について指摘する。

木簡は木材に書かれており、地下水によって守られてきたという遺跡出土の環境条件の問題がある。これは墨書土器の

出土とは異なっているが、宮都に限らず木簡と墨書土器が出土する遺跡も少なくはない。荒井秀規「4 木簡と墨書土器が出土する遺跡」は、官衙遺跡では伊場遺跡（静岡県浜松市）と深江北町遺跡（兵庫県神戸市）・熊の作遺跡（宮城県山元町）、豪族居館跡では古志田東遺跡（山形県米沢市）をとりあげる。また、荘園では東大寺領横江荘遺跡（石川県金沢市ほか）、寺院跡では安芸国分寺跡（広島県東広島市）と但馬国分寺跡（兵庫県豊岡市）をとりあげ、木簡・墨書土器出土の遺跡の性格を考察する。思わぬ発見もあるという。

これまで日本語表記史の研究は、正倉院文書・木簡を除くと、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などから行なわれてきた。さらに大量の木簡が増加し、墨書土器・文字瓦が付け加わった。同時代史料から研究できる条件が徐々に整ってきたのである。犬飼隆「5 日本語学からみた墨書土器・文字瓦」は、古代日本語研究の現状を的確に捉え、研究すべき指針を示している。ようやく「日常ふだん」の言語表記を復元することが可能となりつつある。日本語表記史のほか、和歌史研究にも墨書土器の研究は必要になってきた。

これまでは、主に「墨書土器の諸相」に沿うテーマである。しかし、日本墨書土器の特徴を明らかにするためには、ほかの出土文字史料と比較し、墨書土器ならではの特色をつかむ必要がある。そこで、具体的に生産から詳述できるテーマとして、渡辺「6 生産からみた武蔵国分寺の文字瓦」をとりあげた。論点としては、第一に生産の場においてどのようにな文字が記されていたのか、そして生産現場における文字の来歴問題、第二に瓦造りにおける郡名や人名の文字瓦の意味、さらに工人の在り方問題が問われる。刻書土器研究との比較研究が期待される。

第三部の最後には、これまで紡錘車に記された文字として扱われてきた出土文字史料について、高島英之「7 刻書紡輪」が研究の現状を示している。刻書紡輪という命名については本文に譲りたいが、主に群馬・埼玉を中心とする東国から出土する紡錘車（文字の記銘は紡輪部分に限定される）の文字研究である。本書には、群馬県・埼玉県の刻書紡輪のデータが収録されており、貴重な史料集でもある。東国における「小さな、目立たぬ遺物」といわれるが、今後の古代民衆社会の解明に結びつく、大きな手がかりが秘められていることは、まちがいないだろう。

そして第四部では、個別の遺跡出土の墨書土器について、その地域で活躍する研究者が遺跡の性格とともに墨書土器の特徴について紹介する。遺跡を選ぶにあたっては、遺跡の性格を配慮している。大陸・半島の入口にあたる九州の大宰府遺跡（福岡県）、東北の辺要地に位置する多賀城跡（宮城県）、そして斎王に関係する斎宮跡（三重県）は、いずれも国家的に重要な遺跡である。次に、地方の官衙遺跡として伊場遺跡（静岡県）、寺院遺跡として神雄寺跡（京都府）、神祇信仰に関係す

る青木遺跡（島根県）、荘園遺跡として上荒屋遺跡（石川県）、そして集落遺跡として山田水呑遺跡（千葉県）である。北に位置する遺跡から順次配列し、紹介している。

さらに「附」として、一般読者へのガイドの役割もはたす、高島英之「1 文字が書かれる土器―墨書・刻書土器の形と種類―」と、大川原竜一「2 古代の墨の種類と製作」を配した。ここで墨書土器の「土器」と「墨」について、ていねいな説明を加えている。この「附」から読み始めて、土器と墨についての深い知識を持つことは、本書全体の理解を深めていくうえで、一つの有用な方法となろう。

なお、最後に「出土文字史料」の表記について述べておきたい。最近では国立国会図書館のホームページにおける「歴史史料とは何か」に記されているように、文献史料に限らず、口頭伝承・金石文・絵画などにも史料の用語が使われてきた。遺物・遺跡なども広い意味の史料とされる。本書ではこの歴史史料の用法にしたがって「出土文字史料」の用語を用いたが、各論考においては執筆者の意図を尊重することにした。

以上、四部と附に収録した諸論考と、冒頭の口絵により、墨書土器・文字瓦の研究がより活発となることを願っている。

目次

カラー口絵

- 1 人面墨書土器
- 2 宮都遺跡出土の墨書土器
- 3 地方官衙出土の墨書土器
- 4 寺院遺跡出土の墨書・鏡書土器
- 5 集落遺跡出土の墨書土器
- 6 仮名の鏡書土器
- 7 朱の墨書土器
- 8 文字瓦
- 9 刻書紡輪
- 10 絵画墨書
- 11 赤外線写真で判明する墨書土器
- 12 東アジアの墨書土器・文字瓦

序 文 吉村武彦 i

第一部 出土文字史料としての墨書土器・文字瓦

1 出土文字史料の歴史 吉村武彦 3

はじめに..... 3

一 問題の所在と課題..... 3

(1) 日本列島におけることばと表記 (2) 文字と文房四宝 (3) 出土文字史料の素材と材質 (4) 墨書土器

二 弥生時代における記号文と文字..... 6

(1) 中国からの漢字受容と文字利用 (2) 土器に記された記号文と「漢字」 (3) 銅鐸・銅剣に描かれた記号文

三	古墳時代の文字史料……………	9
	(1)大陸・半島から来た文字	
	(2)鏡に刻まれた銘文	
	(3)列島で記された五・六世紀の刀剣銘	
	(4)土器に記された文字	
四	かわらけに記された文字……………	14
	(1)万葉集と「かたもひ」	
	(2)かわらけの文字	
2	データベースからみた墨書土器……………	19
	はじめに……………	19
	一 墨書土器データベースの集成方針と仕様……………	19
	二 墨書土器データベースの収録データの概要……………	22
	三 墨書土器データベースを用いた分析の事例……………	27
	(1)地域の特性の検討①―十二世紀・十二世紀の墨書土器―	
	(2)地域の特性の検討②―大阪府と兵庫県―	
	(3)特定の土器の検討―人面墨書土器―	
	(4)釈文の検討―「方相」―	
	おわりに―今後の課題―……………	34
3	墨書土器とは何か……………	35
	はじめに……………	35
	一 墨書土器と出土遺跡……………	35
	二 墨書土器と祭祀・儀礼……………	38
	三 饗宴と墨書土器……………	39
	四 墨書土器の文字の意味……………	42
	五 墨書土器にみえるウジとカバネ……………	44
	六 墨書土器の字形……………	45
	三上喜孝……………	35

七 墨書土器と則天文字……………	46
おわりに……………	48
4 墨書土器と情報伝達……………	51
加藤友康……………	51
はじめに……………	51
一 墨書土器とは……………	52
(1) 墨書土器発掘の歴史 (2) 墨書された文字 (3) 墨書土器に注目してあきらかにされたこと	
二 情報伝達の媒体としての墨書土器……………	56
(1) 多文字墨書土器の記載行為 (2) 文字以外の情報——人面墨書土器——	
三 仮名書の墨書土器——和歌墨書を中心に——……………	59
(1) 仮名書の普及と仮名書墨書土器 (2) 和歌墨書土器の出土事例の概要 (3) 和歌の墨書と土器	
おわりにかえて……………	65
5 飛鳥・奈良時代の文字瓦……………	69
中村友一……………	69
はじめに……………	69
一 文字瓦の概略……………	69
二 文字瓦研究略史……………	70
三 文字瓦出土の主な遺跡と記銘内容……………	73
四 文字瓦研究の射程……………	79
五 文字瓦研究の新視点……………	81
おわりに……………	82

第二部 日本と東アジアの墨書土器

1 宮都の墨書土器 市 大樹 87

はじめに..... 87

一 土器の生産・納品..... 87

(1) 宮都の鏡書土器・押印土器 (2) 鏡書・押印の意味 (3) 荷札木簡との比較 (4) 生産現場で記入された文字

二 土器の保管・使用..... 96

(1) 宮都の墨書土器・針書土器 (2) 墨書の内容と目的 (3) 器種と墨書部位 (4) 墨書土器と律令体制

おわりに..... 106

2 地方官衙の墨書土器 柴田博子 109

はじめに..... 109

一 地方官衙の墨書土器の研究史..... 109

二 国府の墨書土器..... 111

(1) 栃木県下野国府跡 (2) 東京都武蔵国府周辺遺跡 (3) 島根県出雲国府跡 (4) 各地の国府の墨書土器

(5) 国府出土の墨書土器

三 郡家と関連遺跡の墨書土器..... 120

(1) 郡家の発見と研究小史 (2) 岐阜県弥勒寺遺跡群 (3) 伊場遺跡群との比較 (4) 郡家関連遺跡

(5) 里家(郷家)

おわりに..... 125

3 寺院の墨書土器 川尻秋生 129

はじめに..... 129

一 瓦葺の寺院..... 129

(1)寺名 (2)郡名寺院

二 寺院機構と墨書土器..... 131

(1)国分寺の伽藍 (2)造営・維持機構

三 村落寺院..... 134

(1)寺名 (2)仏具 (3)集落と酒 (4)重層的信仰

おわりに..... 138

4 集落の墨書土器 栗田則久 141

はじめに..... 141

一 全国的な傾向..... 141

二 千葉県内の状況..... 145

(1)上谷遺跡・栗谷遺跡 (2)萱田地区遺跡群・村上込の内遺跡 (3)山邊郡内の様相

おわりに..... 156

5 韓国出土の古代墨書土器 金 在弘 157

一 墨書土器と刻書土器..... 157

二 三国時代の墨書土器..... 157

(1)高句麗 (2)百濟 (3)新羅

三 統一新羅の墨書土器……………	161
(1) 王京の墨書土器 (2) 地方の墨書土器	
四 墨書土器の考古環境……………	168
6 中国の墨書陶器・墨書陶磁器……………	171
はじめに……………	171
一 朱書陶器……………	171
二 墨書陶磁器……………	174
(1) 寺院遺跡 (2) 都市遺跡 (3) 沈没船遺跡 (4) 生産関係遺跡	
三 日本との関係……………	180
おわりに……………	181
7 百済・新羅の文字瓦……………	185
李 炳鎬原著／生江麻里子翻訳	
一 序 論……………	185
二 百済の文字瓦……………	185
三 新羅の文字瓦……………	192
四 結 論……………	197
8 出土文字資料と安南都護府の研究……………	201
ファム・レ・フィ	
はじめに……………	201
一 安南都護府の設立年代……………	201

二 出土文字資料からみた安南都護府の所在地……………204

三 出土文字資料からみた安南都護府の実態……………212

おわりに……………215

第三部 墨書土器の諸相

1 下総国府から考える人面墨書土器祭祀……………山路直充 225

はじめに……………225

一 研究の流れ……………225

二 北下遺跡とその祭祀……………226

三 人面墨書土器の器形と面相……………228

 (1)人面墨書土器の器形 (2)人面が示すもの

四 人面墨書土器の祭祀……………236

 (1)祭祀の場 (2)馬の犠牲 (3)祭祀の担い手 (4)滅罪の祭祀 (5)祭祀の伝播

おわりに……………242

2 仮名書き土器……………鈴木景二 245

はじめに……………245

一 成立期の仮名と仮名書き土器……………245

二 平仮名成立期の墨書土器……………246

三 地方社会での仮名……………248

四 国府ゆかりの和歌……………249

五 いろは歌、院政期の仮名書き土器…………… 251
 むすび…………… 252

3 墨書土器の文字…………… 荒木志伸

はじめに…………… 255

一 モノ資料としての木簡・墨書土器…………… 255

(1) 木簡と墨書土器 (2) モノ資料としての観察と文字解釈

二 「寺」墨書土器…………… 256

(1) 「寺」の文字の意味と解釈 (2) 「寺」関係墨書土器の出土事例

三 「寺」の墨書行為について…………… 260

(1) 「寺」関係墨書土器に共通する特徴 (2) 「寺」の持つ意味 (3) 寺院施設外でおこなわれた法会——『日本霊異記』から——

おわりに…………… 263

4 木簡と墨書土器が出土する遺跡…………… 荒井秀規

はじめに…………… 265

一 官衙遺跡 その1——伊場遺跡群…………… 265

(1) 栗原駅 (2) 布智郡家と軍団 (3) 税制関係木簡 (4) 木簡の祭祀と墨書土器の祭祀

二 官衙遺跡 その2——深江北町遺跡・熊の作遺跡…………… 269

(1) 深江北町遺跡 (2) 熊の作遺跡

三 豪族居館跡——古志田東遺跡…………… 269

四 荘園遺跡——東大寺領横江荘遺跡…………… 271

五 寺社関連遺跡——安芸国分寺跡・但馬国分寺跡・青木遺跡…………… 272

7 刻書紡輪 高島英之 297

はじめに..... 297

一 刻書紡輪の年代・形状..... 300

二 刻書紡輪の文字..... 300

(1) 紡輪に記された文字の特徴 (2) 祭祀・信仰に関わる内容が記された紡輪 (3) 紡輪との関連の有無..... 305

三 刻書紡輪の用途と機能・意義..... 307

四 出土地域の偏り..... 308

おわりに..... 308

第四部 遺跡のなかの墨書土器

1 宮城県多賀城跡 吉野 武 322

2 千葉県山田水呑遺跡..... 木原高弘 324

3 静岡県伊場遺跡 鈴木敏則 326

4 石川県上荒屋遺跡 (東大寺領横江荘遺跡) 出越茂和 328

5 京都府神雄寺跡 (馬場南遺跡) 松尾史子 330

6 三重県斎宮跡..... 新名 強 332

7 島根県青木遺跡 平石 充 334

8 福岡県大宰府遺跡 酒井芳司 336

附 墨書土器ガイド

1 文字が書かれる土器 — 墨書・刻書土器の形と種類 — 高島英之 341

はじめに — 墨書・刻書土器とはなにか — 341

一 土師器と須恵器 342

(1) 土師器 (2) 須恵器

二 古代の土器の形態と変遷 344

(1) 土師器杯 (2) 須恵器杯 (3) 碗 (4) 土師器甕

三 墨書・刻書土器の器種・器形について 347

(1) 記載方法別の墨書・刻書土器の数量 (2) 器種別の墨書・刻書土器の数量 (3) 器形別の墨書・刻書土器の数量

まとめ 349

2 古代の墨の種類と製作 大川原竜一 351

はじめに 351

一 日本古代の墨の資料 351

二 原料からみた古代の墨の種類 352

三 古代における墨の製作 353

おわりに 354

おわりに―研究の経過―……………吉村武彦

355

執筆者紹介……………

359